

表2 アメリカの主な発掘庭園

名 称	所在州	調査年
Governor's Palace in Williamsburg	Virginia	1930-31
John Custis's garden in Williamsburg	Virginia	1964
William Paca's garden in Annapolis	Maryland	1966
Carter's Grove	Virginia	1968, 70, 71
Kingsmill Plantation	Virginia	1972-75
Thomas Jefferson's Monticello	Virginia	1979-82
Peyton Randolph garden in Williamsburg	Virginia	1983
Bacons Castle	Virginia	1984-87
James Shield's tavern in Williamsburg	Virginia	-1986
Stockton gardens at Morven	New Jersey	1987-90
George Tucker's garden in Williamsburg	Virginia	1994-95
Thomas Jefferson's Poplar Forest	Virginia	1998-99

アメリカにおける庭園の発掘調査と復元整備

アメリカにおいて発掘調査がおこなわれた歴史的庭園のほとんどは大西洋岸のチェサピーク湾 (Chesapeake Bay) 周辺にある(表2)。ここは、イギリスからの初期の移民の入植地でありアメリカ建国の主要な舞台であった。多くの庭園は独立戦争が起きた18世紀に築造されたが、現代まで存続しているものはない。文化財として復元整備された庭園のほとんどが、現代に博物館として活用されるようになった歴史的建造物に付属するものであり、整備をする前提で調査されたものが多い。

発掘調査 18世紀のアメリカの庭園の多くは平面的であり、植物が特に重要な視覚的構成要素である。その点で、遺構として残りやすい、池、築山、石組などの植物以外の構成要素が多い日本の庭園とは性質が異なる。出土する遺構は主に舗装路、柵、花壇、植栽の区画、樹木根の跡などである。したがって、復元案作成時には植物の種類や大きさ、配置、剪定の形などが重要な検討事項となる。また、日本で発掘された庭園は鑑賞や娯楽のためのものが多いが、アメリカでは大邸宅の広大な土地や庶民の住居を調査する結果、鑑賞用以外の、菜園や作業用の庭が出土することもある。機能の違いにより各庭にはそれぞれにふさわしい植物が植えられていたはずであり、この意味でも植物の種類の解明が重要な調査事項となっており、花壇や植栽の区画内の土壤の科学的な分析や花粉などの植物化石の分析に特に力が注がれている。また、大規模な邸宅に付属する庭では調査対象が広大になることもあり、リモートセンシングやレーダー探査が利用されている。

復元整備 復元整備については、1930年代から現在まで続けられているウイリアムズバーグ (Williamsburg) が注目される。ここは18世紀に活況を呈しアメリカ建国の重要な舞台となった街である。中心部の歴史地区は財團によって管理され、100以上の建物、20以上の庭、広場、街路などの修復、復元整備により、独立戦争前(18世紀後半)の街が再現されるとともに、当時の衣装を着た従業員により、人々の生活状況が演出、解説されている。アメリカ有数の史跡であり、年間400万人以上が訪れる一大観光地になっている。

庭園の復元整備の最初期の事例で代表的なものは、ガバナーズパレス (Governor's Palace) の整形式庭園であり、1930年代に復元整備が始められた。発掘調査を含む学術的な研究がなされたものの、真実性の面では問題が多い復元整備が実施され、当時も批判を受けた。その頃の整備方針では美観や訪問者を楽しませることが最も重視され、街中が装飾的に整備される傾向が強かった。1980年代以降は調査成果に忠実で、より確かな復元整備が実施されるようになった。研究の進展により、当時の一般家庭には装飾的な庭園ではなく、菜園や果樹園などの実用的な庭がつくられていたことが解明され、復元整備に反映されている。1980年代はちょうどフィレンツェ憲章が庭園復元整備のための先行調査の重要性を謳い、日本では平城京左京三条二坊宮跡庭園が復元整備された頃であり、国際的な節目であったことがわかる。そして現在、整備関係者の話によると、初期の整備を全て改修することは考えられていない。それは、18世紀の真実に合致しない表現だとしても、歴史観が変化、発展してきたことを訪問者に印象づけることができるという新たな意義が見出されているからである。ただし、現地ではそのことを解説板などでは明示しておらず、何らかの方法で見学者にその意図を伝えることが課題である。訪問者を楽しませるという方針は現在にも受け継がれ、当時のものに似た食事や品物を、製造過程を見せながら提供する飲食販売店が復元建物内に設けられている。また、周辺には様々な娯楽施設や宿泊施設がある。

庭園の本来の主用途は鑑賞や散策にある。したがって復元整備された庭園でも利用者は本来の機能を享受しやすい。このことは、庭園の復元整備において美観や快適性が偏重されがちになる要因の一つでもあるが、他の種類の遺跡にはない公開整備上の利点であり、ウイリアムズバーグにある庭園や緑地は複数回の来訪者をも惹きつける大きな特長になっている。

(中島義晴)